

「ボサノヴァダンスを発明した謎のアメリカ人振付師：レニー・デイル」

ボサノヴァ全盛期のリオ・デ・ジャネイロのナイトクラブでは、多くのアーティストたちによって夜を徹してボサノヴァやジャズ、ジャズ・ボッサ（ジャズ・サンバ）が演奏されていた。その中には後世に名を残す若手ミュージシャンも少なくなかった。

そんなリオの熱い夜に、突如として現れたアメリカ人がいた。本名がレナード・ラ・ポンツィーナである。彼は振付師でレニー・デイルと呼ばれていた。彼の名前や芸歴は一般にはほとんど知られていないが、彼の当時の音楽シーンに与えた影響は決して小さなものではない。

多くの人が疑問に思うように、なぜアメリカ人の彼が、南米ブラジルのしかもリオのナイトクラブのステージに立つことになったのか？1960年に彼は、エリザベス・テイラー主演の映画「クレオパトラ」の製作のため、ロケ地であったローマで振付のアシスタントをしていたところをブラジル人のカルロス・マシャードに見出され、リオのショービジネス界に足を踏み入れることとなったそうだ。

彼のリオの音楽シーンへの登場は大変センセーショナルなものであった。彼はボサノヴァをヴィジュアル面でも表現するために、しばしばステージで歌うこともあった。両腕をプロペラのように回したり、ヘリコプターのように宙を舞うといった、奇想天外な動きに周囲は圧倒されたという。ささやき歌うといった上品なボサノヴァのスタイルに相反するかのような力強い声に加えて、躍動感溢れる動きでボサノヴァを視覚的な面からも表現するといった彼のスタイルは、当時としては大変新鮮なものであった。そもそも、当時のブラジルでは、歌って踊るためのサンバに対して、ボサノヴァに踊りというものが加味されること自体到底考えもされなかったことであった。

そんなレニー・デイルの活動の記録は3枚のLPとなって残されている。1963年に録音された最初のLPは、コパカバーナのナイトクラブ“ボン・グルメ”でのライブ演奏が収録されたもので、彼のパフォーマンスや当時の音楽シーンを知る上でも大変興味深い。また、特筆すべきことにこのライブの中で彼は、英語をまじえて自身があみ出したボサノヴァダンスを実

演している。彼はマンゲイラ、ドゥプロ、バッフォ・ダ・オンサ、ブラッソスといった4つのステップでボサノヴァをヴィジュアル的に表現して見せた。

1963年のファーストアルバムに続いて彼は、1965年と1967年にアルバムを残している。計3枚のアルバムに共通して言えることは、彼の歌と踊りをサポートするバックには常に当時指折りのピアノトリオが参加していることである。1963年のファーストアルバムでは名ピアニスト、ルイス・カルロス・ヴィーニャス率いるボッサ・トレス、1965年のセカンドアルバムではその後エリス・ヘジーナの下でも活躍することになるピアニスト、セーザル・カマルゴ・マリアーノに加え、3年後にはアメリカに渡ることになるドラムスのアイルト・モレイラが参加した、サンバラソ・トリオ、1967年のサードアルバムでは弱冠20歳の天才ピアニスト、アントニオ・アドルフォ率いるトリオ3-Dがバックをつとめハイレベルな演奏を繰り広げていることにも注目したい。

しかしながら、1967年に3枚目のアルバムを出して以来、彼は音楽シーンから突如姿を消してしまう。彼のことを扱う文献などは極めて少なく、その後の彼の行方を示すものはほとんど皆無に等しいと言っている。ただ、『ブラジル音楽のすばらしい世界』（クラウス・シュライナー著、中村とうよう監修、ニューミュージックマガジン社、1979）の中で、“1970年半ばにパリで前衛的なショー「ジ・クロケット」を率いた”という記録が残っているところを見ると、ボサノヴァの低迷と共にブラジルを離れたとも考えられる。リオの音楽シーンに彗星の如く現れた謎のアメリカ人振付師は、3枚のアルバムを残し忽然とブラジル音楽界から姿を消してしまったのである。

彼の残したダイナミックな動き、力強い歌声とパフォーマンスはエリス・ヘジーナやウィルソン・シモナル、ペリー・ヒベイロといった、その後の音楽シーンの中心となる歌手たちによって引き継がれた。ブラジルの国民的歌手であるエリス・ヘジーナは、レニー・デイルとのリハーサルは“水泳のレッスン”と述懐している。また、エリス・ヘジーナの“プロペラ”という綽名もレニー・デイルの踊りから来ていると考えられる。まさしくレニーの出現により、ささやくように歌う上品なボサノヴァのスタイルは破壊されたといっても過言ではない。

残念なことに、彼のあみ出したボサノヴァダンスを踊れる者は誰も現れなかった。彼の踊る姿を記録した映像も残されてはいないと思われる。唯一彼の音楽を知ることのできる3枚のLPは、どれも入手困難なコレクターズアイテムとなっている。彼の2枚目のLPのライナーでエレンコのレーベルオーナーであるアロイジオ・ヂ・オリヴェイラは、「この音源を聴くことで容易にレニーのショウをヴィジュアル化することができる。サンバラソトリオの演奏と共に1曲1曲がまるで生きているかのようだ」と評している。ともあれ、機会があればぜひ多くの方々に聴いていただきたい。きっとブラジル音楽に魅せられた熱きアメリカ人と、そんな彼を温かく受け入れるブラジルの聴衆、そして当時の音楽シーンを垣間見ることができるはずである。

研究員 青木義道

2005年8月8日

BIBLIOGRAFIA (参考文献)

クラウス・シュライナー著・中村とうよう監修 / ブラジル音楽のすばらしい世界 / ニューミュージック・マガジン社 / 1979

ルイ・カストロ著・国安真奈訳 / ボサノヴァの歴史 / 音楽之友社 / 2001

ラティーナ1993年11月号

ラティーナ1993年12月号

ラティーナ1994年1月号